

第16回

秀麗富嶽十二景写真コンテスト

入選作品

最優秀賞

朝霧の詩

高橋 英子（東京都大田区）

牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

十二景山頂中、小金沢と並んで、もっとも不便な山域からの展望。雁ヶ腹摺山からの富士山が、十二単衣の富士と呼ばれ、前景の山ひだの数によって、いかにも深山からの富士山と称されるのであるが、この牛奥ノ雁ヶ腹摺山もそれに劣らず山深い。しかし、前景となる山ひだは、すぐ前に盛り上がる黒岳のためさえぎられている。この作品はそれに代るものとして朝霧を用いた。黒岳山につづく山腹に漂い流れる朝霧によってデリケートな調子が何ともいえない不思議なムードをかもし出している。うっすらと色づく朝空に端坐する富士山は、さながら墨絵を思わせる幽幻さをたたえている。

推薦

雲乱れ飛ぶ朝

小谷 哲朗（三重県松坂市）

百蔵山



白簾史朗氏講評

たかだか1000メートルの百蔵山からの富士山とは思えない高度感の表現がすばらしい。富士山の雪肌にあたった陽が、色あせたてからのシャッターチャンスであるが、そのため雪肌と雲とに適度の明暗コントラストが生じた。

「雲乱れ・・・」という表現は雲に比して動きがおとなしく、あまり適切ではないが、画面の美しさがそれを補って効果をあげている。欲をいえば、中間の集落が雲でかくれ、右下方にも雲があると申し分ない。とはいえ、なかなか佳作をものにできにくい百蔵山の富士山としては出色の出来だといえよう。

推薦

うす紅に明ける 奈木 正次（静岡県沼津市） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

何ともいえぬ幽玄さをたたえた富士の夜明けである。題名があまり端的で少々つまらない気がする。ここはやはり「幽玄の夜明け」とか「日本の朝」というようなポエムが欲しい。しかし何といても、過去、5回の最優秀賞を獲得した実力は他の追随を許さない。画面下部から中間部へと移行する微妙な調子は、上部に君臨する朝焼けの富士の柔らかな色づきとあいまって、これぞ“富士”ともいうべき端正さに満ちている。最優秀賞の「朝霧の詩」とはまた異なる心象的表現は作者独特の持ち味といえる。

特選

きさらぎの空薄紅雲流れる 天野 昭吾（山梨県大月市） 奈良倉山



白簾史朗氏講評

奈良倉山から長焦点レンズで拡大した富士山。富士山四合目あたりまでもやがあつたが上方の大気がクリアーだったため、コントラストが付いて強い表現となった。ただ、左上方の雲と下方の薄雲とのバランスが悪く、上方がやや重い。朝焼けの色相も若干、最高潮時を逸しているため、後半の色付き、橙々色となったのは残念。苦言をもうひとつ、題名があまりにも長く、冗長であるとともにその雲の動きが題名の表現にそぐわない。それとレンズの焦点距離の記入がなかった。こしたことは規則であり、厳守しなければならない。

特選

ミツバツツジ咲く

大戸 康世（山梨県大月市）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

右下方からでたトウゴクミツバツツジの花枝が、左上方の富士山にそろってのび上がっている。モチーフがやや画面中心に集まりすぎているきらいがあるが、まずまず美しい作品といってよい。これでカメラがほんのもう少し左方に位置していたら申し分なかった。しかし、花の開花状態、富士山の残雪の量、多少あったもやも画面の単純化を助けている。やはり地元の利ということは大きいと思うが、それにも本人の努力の方が大きい。いままでの花と富士山の組み合わせ中、上位にランクされるものと考える。

特選

樹氷の朝 夏目 政俊（愛知県豊橋市） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

樹氷ではなく、この状態は霧氷という。それに作者のデータ記入では大倉高丸とあった。これも注意すべきことである。美しい樹氷に飾られた稜線からの富士山、まったく申し分ない状態といえるが、惜しむらくは左方大谷ヶ丸の山頂が富士の裾引くラインを止めるような位置にある。それと右手の霧氷と樹林の調子と富士山の雪が飛んでしまっていて画面全体がかるくなってしまっている。左方を切り、全体の色彩濃度を上げることが今後の課題となろう。

入賞

雲表の妖雲 愛澤 和弘 (埼玉県所沢市) 百蔵山



白簀史朗氏講評

何となくおかしい感じがしたのは、「雲表の妖雲」と雲が重なったためだろう。雲表といえば雲海の上をいうが、ここではただ薄くたなびいた雲で雲海ではない。上方に幾筋かある雲は、まあ妖雲でも差し支えないが、もう少し題名は考えた方がよい。全体にマゼンタがかぶっているため、色調が不自然なこと、上空が少し空きすぎるなど考える点がある。ただ、うまく落ち着いた構図になっているが、上方にもっと雲が欲しい。

入賞

山頂の春 池田 浩樹（山梨県大月市） 滝子山



白簾史朗氏講評

全体的にきゅうくつきが見えるのが残念。これは画面全体の濃度が高すぎ（濃いということ）ることと、ツツジの花が画面下方に位置しすぎていることからである。この第一の濃度の点はラボの責任もあるが、作者はこうした点に指示が必要である。第二の点はカメラポジションを少し下げれば解決する。写真は難しいようで、実際はさほどでもない。要は作者がもっと柔軟な考えをもつこと、それがすべてに通ずるのである。

入賞

桜花咲く

伊藤 恵子（東京都大田区）

お伊勢山



白簾史朗氏講評

サクラと富士、これこそ日本を代表する風物といえよう。このふたつが合するとき、私たちは日本に生まれたことの幸せを心から感ずる。たわわに花をつけたサクラ、春雪をたっぷりとまとった富士山。しかし、この組み合わせはまことに難しい。俗に落ちず、華美と孤高の組み合わせをどうするか。それには双方の花の量と入れこみ方、富士山の花に対する大きさと全体のピントである。また、この作品は左方が少し空きすぎ、富士山が少し傾いている。まずそれを是正しよう。

入賞

黎明

大内 京子（千葉県我孫子市）

牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

最優秀賞作品と同一の場所、条件、時間帯もほとんど同じである。これを最優秀作品と比較対照してみると、まず気付くことは手前の山肌にからまる朝霧である。霧の位置、動きが明らかに異なり、手前の山肌が、この作品では暗部が多い。題名は「黎明」と明け行く状況を表現したが、その場合は中間部分までは必要なかった。上部のみでまとめるとまた、おのずと違った作品となったろう。ここに表現の厳しさがある。画面右端から富士山頂までのスペースの3分ノ1、上下ともに真中まで半分、左方を少し切って上部にのぼすことが必要。

入賞

朝日に染る 帯金 晃（静岡県沼津市） 奈良倉山



白簾史朗氏講評

冬とはいえ、近年暖冬のため大気中にもやが多く富士山撮影には仲々に苦労する。だが、この作品にはそのもやをうまく利用して実に美しい表現に成功した。これには前夜降った雪が大いにあずかっていて、全体を淡い蒼の色調でまとめることが容易であったこと、上空と富士山の色づきが画然と分けられたためである。上下の割合も、全体のバランスも良く、ほぼ100パーセント条件を生かし切れた。ただ「朝日に染まる」の題名は「雪後の朝、富士より明ける」的なものの方がふさわしい。

入賞

荒荒しい富士 岸野 景佐夫（埼玉県上尾市） 奈良倉山



白簾史朗氏講評

やや上空が空きすぎではがあるが、題名そのものの荒々しい富士山ではある。ことに左上方に千切れそうにのびる雲が生きている。光の状態も立体的ではなかなか良い。しかし、これらすべてを生かせないのは、全体にピントが悪いことである。データを見ると35ミリ判にズーム70～200ミリをつけ、200ミリ+テレコンバーター使用とある。これでは折角の作品も下位に甘んじるほかはない。ピントさえよければと、まことに残念に思う。コンバーターでそれがより助長された。

入賞

冬晴れ 瀬瀬 浩恭 (岐阜県多治見市) 高川山



白簾史朗氏講評

富士の雪肌に雪煙が巻くだけで、空には一片の雲もない。まさに冬晴れであるが、少々単調さがぬぐえない。こうした場合、思い切って周囲をトリミング、富士山の山体を大きく、どっかりと画面に置きたい。この作品のように周囲すべてが同色でかこまれていると、富士山が心理的にもより小さく見えることになる。それを打破するには、四囲のどこかに突破口を作るしかない。そうすると「冬晴れ」という題名も生きてこよう。長焦点、望遠レンズの乱用はあまりすすめたくないが、たまには慣習を破ることをおこなうも必要である。

入賞

堂々

坂本 恒義（神奈川県相模原市）

九鬼山



白簾史朗氏講評

あまりに綺麗に撮りすぎたため、堂々とした感じが薄らいでしまうことがよくある。この作者も富士山に正対して、富士山に圧倒された心情からの題名だろうが、ここはもう少し大きく、少なくともこの倍くらいの大きさがふさわしい。645判で420ミリレンズというが、富士山は近いように見えるのは心情的にそう感ずるからで、実際は意外に遠い。ピントは良好なのでもっと引き伸ばしで大きくするも一法である。画調も今一步、もっと雪の調子を出したい。

入賞

晩春の富士 佐藤 義雄（山梨県都留市） 高畑山



白簾史朗氏講評

晩春ということばには爛熟という意味が含まれることがある。だが、この緑には初夏という言葉こそふさわしい。それにべつとりと雪をつけた富士はまだ浅春の姿であって、高所と下界の季節の進行の違いはなかなか一致しない。この作品は画調のコントラストが極端で、新緑は暗く、逆に富士の新雪は調子も何もなく飛んでしまっている。ラボによって画調は異なるので、自分の作品にあったラボを探すことが大切。左方の樹林が混みすぎてより重くなっている。

入賞

初夏のハマイバ 瀬沼 茂雄（東京都福生市） ハマイバ



白簾史朗氏講評

特選の「ミツバツツジ咲く」の作品と同様の構図。ただし、こちらは白花で、左からのび上がった枝先の白花上に富士山がある。左右が逆だけの構成であり、こちらの富士山の方が大きく写し込まれている。ここで残念なのは白花が少しピントが悪いこと、それと富士山もピントが届ききっていない。つまり、好条件を生かし切れていないといえる。どちらかというと後方にピントが合う、いわゆる後（あと）ピンなのである。写真は一枚一枚全身全霊を込め、すべて完全に整えてシャッターを切りたい。

入賞

晩秋 高津 秀俊（山梨県大月市） 姥子山



白簾史朗氏講評

色づき終わった葉が枝先に付いた樹林、富士山の新雪、秋雲。まさしく秋の光景であるが、ちょっと考えすぎであり、題名がイージーにすぎる。晩秋と題するには枝先きの葉がすべて、またはほとんど落ちている必要がある。この場合、題名は「深まり行く秋」とでもすればぴったりとなる。また画面の調子が暗すぎて、秋の透明感に乏しい。右方を少し、下部を5分ノ1、左方を4分ノ1ほど切って構成するとずっと明るく、秋らしいものとなったろう。

入賞

降雪やんで新雪の華 高橋 利延（神奈川県相模原市） 岩殿山



白簾史朗氏講評

これも題名がくどいと思う。ここにも雪の字が重複しているが、ここはただ単に「新雪の華咲く上に」とか、「新雪樹々に咲く」と簡潔にまとめた方が効果的だ。作品は構図的にはうまくまとめているが、左方の山を半分ほど切った方が、より樹の雪も富士山も大きくなる。画調は美しく、いかにも清新な冬富士、といった表現になっている。樹枝の中央部の縦に直線的になった枝、それと右上方の湾曲した枝は整理したい。

入賞

新雪の彼方に 谷口 一只（埼玉県加須市） 本社ヶ丸



白簾史朗氏講評

こうした場合、新雪の彼方でなく、積雪の彼方となる。実際には新雪であっても、一部だけしか写り込んでいない。新雪は一面にあつてこそ新雪で、それだからこそ新鮮で美しいものとなる。両面構成は上部が重く下が軽い上うえに左方が重い。これは左方の山肌の黒さが影響している。でき得れば少し後退してカメラポジションを下げ、もっと広角（たとえば標準）を使い、雪面を大きく、山肌をかくして、富士をその上方に置きたい。さすればもっとどっしりとした構図の作品となったろう。

入賞

モミジ色づく上に 内藤 均（山梨県南アルプス市） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

ミネカエデの色づきは最高、富士山にも新雪がかかり、光線状態も横からで絶好の条件であるのに、それを生かし切れていない。まずモミジのピントはOK、しかし富士山にピントが届いていない。つまり、絞り値が小さい（開放寄り）ため、被写界深度が浅かったわけだ。モミジにピントを合わせ、絞値11くらいで充分全体にピントが合うはずである。それと画面の四方すべて（富士山上空半分位、他も同様）カットしたら、実にスッキリした作品になったろう。

入賞

莊巖

福井 一夫（埼玉県狭山市）

清八山



白簾史朗氏講評

風は強いがよく晴れた冬の朝、くっきりとそびえる富士山には冒しがたい威厳がある。それをどのように表現するかにもた作者は悩むのであるが、ことばの意味を取り違えると表現も異なってくる。莊巖の意にはおごそかで堂々とした、さらには立派といったことだが、そうだとしたら、もっと大きく撮り込むことが必要ではなかったか、選者はそのように考える。実際にももっとアップにした方がインパクトも強烈なものとなったろうと残念に思う。

入賞

川霧静かに 松本 邦弘（埼玉県入間市） 倉岳山



白簾史朗氏講評

川霧はどこにあるのだろう、そう思って探してみた。右下方に少し白いものがあり、それがそうだと思うしかないようだ。これではあまりに画面と題名がそぐわない。選者ならば「天地、いま目覚める」的なものとするだろう。そうしないと、富士山の色づきはともかく、手前の山や谷はただ単なる黒いマッスとしか見えない。高所（天）にある富士山に陽があたり、地の胎動が霧を生む。そうした心理的な解釈に持って行くと、この作品はもっと良くなったろう。もう少し下部の調子を薄くするとさらに良い。

入賞

新雪の朝 宮地 広之（東京都世田谷区） 扇山



白簾史朗氏講評

滝子山の作品同様、少々きゅうくつな感じが拭えない。これも雪の付いた木々の梢が中途半端に入りこんでいるからで、もっと整理して形よく入れこんだ方がよい。それとそれがため、中間の山地が多く写り込んでしまい、そこ一帯が間のびしたこともある。この山地の中間調を雪の付いた樹々の梢でうまくかくすことが必要で、こうしたことを画面構成、つまり構図というのである。富士山の感じはとても良いもので、もう少し、と惜しまれるところだ。

入賞

新緑の頃 村上 敏幸（山梨県大月市） 小金沢山



白簾史朗氏講評

地味な黒木の多い小金沢山からの前景、それを考慮しての季節に新緑の候を選んだことにまず感心する。黒木林といっても、その中には必ず幾分かは闊葉樹が混ざっているものだ。それが的を射て、明るい画面が得られた。ただ、それをもっと生かして構成したら、と思われるのは、手前の明るい葉むらを生かすことで、左方6分ノ1をカット、下方も同様に6分ノ1を切つてまとめると、ゲンと全体が生きてくる。発想はそれをさらに発達させてこそ成功する。

入賞

師走の朝 八巻 長子（山梨県中央市） 笹子雁ヶ腹摺山



白簀史朗氏講評

富士山に当る光の角度、上空の雲の色づきも良い。しかし、これは何も師走でなくとも撮れる条件。作品にそうした個人の感じた季節、撮影した季節がたとえそうであっても、見る人にはストレートに通じはしない。そうした理由から題名を付けるのはマイナス点が多い。全体は美しく仕上がっているが、残念なことに左方中央部のあきに加えて、右上方も物足りない。かえって富士山頂部と上空の雲のみでまとめたら良かったのではないか。

総評

審査員長 白籟史朗

大月市・秀麗富嶽十二景写真コンテストの審査は、平成21年1月23日、大月市役所三階委員会室で、全審査員立ち会いのもと、午後1時30分開始された。今回の応募者数45名、応募点数241点であった。昨年の天候不順、社会的不況が影響してか、昨年度に比較して応募人員でマイナス3名、応募点数では46点という減少であった。大月市域では応募者9名で、作品56点、山梨県内では5名で29点、県外からは31名、156点の応募であった。

また市域での入賞者は5名、山梨県内3名、県外では愛知県1名、千葉県1名、東京都4名、埼玉県5名、静岡県2名、神奈川県2名、岐阜県1名、三重県1名である。

今年の入賞者を見ると、過去入賞者中19名が受賞したが、その回数が多い応募者から列記すると、先ず

11回が2名、天野昭吾氏(大月市)が11回17点入賞、次いで高津秀俊氏(大月市)が11回14点入賞、さらに八巻長子氏(中央市)が10回12点入賞となっている。

次いで高橋利延氏(神奈川県)が8回9点入賞、奈木正次氏(静岡県)が8回14点入賞、瀨瀬浩恭氏(岐阜県)が7回8点入賞、小谷哲朗氏(三重県)が6回7点入賞、松本邦弘氏(埼玉県)が6回6点、宮地広之氏(東京都)が5回5点、大戸康世氏(大月市)5回7点、帯金晃氏(静岡県)が4回4点、谷口一只氏(埼玉県)が3回3点、夏目政俊氏(愛知県)、大内京子氏(千葉県)、瀬沼茂雄氏(東京都)、村上敏幸氏(大月市)ら4名が各2回2点、伊藤恵子氏(東京都)、愛澤和弘氏(埼玉県)、坂本恒義氏(神奈川県)ら3名が、各1回1点となっている。

これら中、入選回数と入選点数が異なるものがあるが、これは一回のコンテストに上位入選プラス下位入選があったためである。

この中で第1回から応募した作者は天野昭吾氏で、次いで早くからの応募をされたのが奈木正次氏である。天野氏は最優秀賞を一回受賞されているが、奈木氏は第3回からの応募で最優秀賞を5回獲得し、あまりに受賞が偏るということから11回から15回まで応募自粛され、今回それを再開されたのであるが、そのため入賞数が少なくなっている。

今回の入賞作品中、奈良倉山、大蔵高丸が各3点、牛奥ノ雁ヶ腹摺山と百蔵山が各2点入賞している。これは以前から上位入選作品作者は、他の応募作品中に適当な作品がないとき、下位入選作品に限ってダブル入選が許されていた。今回

はそれをやめ、なるべく多くの応募者を入賞させたため、同じ山からの作品が増えたわけである。

今回応募された作品は、最優秀賞、推薦2点、特選3点は、それぞれ賞にふさわしい作品を選出し得たが、入賞作品となるとやはり一段落ちるといわざるを得ず、不本意な作品の選出もあった。

全般的に見て、古くから優秀な作品を応募された方が減って、新しい方が増えたとはいっても、まだ突出した好作品がどうしても不足する。過去、優秀な作品を出品された竹田辰己、小林博、佐野文隆の各氏、また出品されても、撮影条件不良のためか、入選されないで涙を呑んだ方々も多い。佐藤知津夫、高宮徹、長谷川政雄、権正光夫、内藤元次、瀬瀬麻實、加藤泰郎ら各氏の名がないのは淋しい。

ただ、若干は心強いのは、岸野景佐夫、内藤均、福井一夫ら3氏の初入選という新鋭の出現である。こうした古くからの人たち、新進気鋭の作者たちが、これからもずっとこの秀麗富嶽十二景写真コンテストを支えて下さるだろうことを期待すると同時に、この地球の温暖化、天候異変が、人類の叡知によって一日も早く克服されることを心より願うものである。